

第八識在存の證明

吉田素恩

第八阿賴耶識の存在する所以を證明するに就きて、唯識論第三卷^{十六}以下、具さに五箇の至教量と、十箇の比量とを列擧す。

五箇の教証とは、

1、大乘阿毘達磨經

2、空上

3、解深密經

4、入楞迦經 以下大乘

5、小乘

A、大衆部名=根本識

B、上座部名=有分識 說假部亦同之

C、化地部名窮生死蘊

D、有部名=阿賴耶識

を云ひ、十箇の理證とは、

1 種持證

2 異熟心證

- 3 趣 生 證
- 4 執 受 證
- 5 壽 煖 識 證
- 6 生 死 證
- 7 識_ト色_色(名_ト)互_ニ爲_レ緣_ト證
- 8 四 食 證 第四卷初紙以下
- 9 滅 定 證
- 10 染 淨 證

を云ふ。然るに凡そ此等の教証及び理證は、其の旨とする所、小乗の人をして、大乘唯識深妙の法義を信せしめんが爲にあれば、今理論的證明と云ふと雖も、尙未だ經說に依りて之を歸納せるに過ぎず。故に甚だ學究的通俗的ならざるが如き觀あり。然れども更に精細に此等を點檢し來たれば、其の論述中、又自ら幾多普遍的の論理形式を包含せざるに非ず。今其の一二を抽出して、加ふるに吾人の淺見を以てせば、第八識存在の不可疑的事實なること左の如し。

(A) 蓋し動あれば、必ず反動ありとは、物理學^{リキヨウガク}の原則にして、感應因果の理法は、一切諸科學の前提とする所也。因果の法則、豈に管に佛教の專用ありとせんや。今夫れ吾人が善良なる心的發動によりて、身に一大義德を行はんか、之れに報ずるの善果は必ず來るべく、又吾人が不良ある心的行爲によりて、一大罪惡を敢て犯さんか、之れに酬ゆるの惡果は必ず招く可し。是れ極めて了解し易き事實也。而して其の前に既に起し、且つ爲せる善心善行、及び惡心惡爲は、後其の結果を招感する時に至る迄現存すとせんか、將た滅無すとせんか、若し現存すと云はば、其の善心善行、及び惡心惡爲は、恒時的不斷的に

常に相續せざる可らず。

然るに吾人の心意行事は、刻々時々變換推移して、善心起るも、忽ち滅し去れば惡心次いで起り、惡心起るも、亦忽ち滅し去れば、善心更に起り來るが如く、其の狀恰も石火電光の、明又滅、一定せざるに似たり。故に善惡の心意行事は、一見其の結果を感ずるの時到來まで、恒存せざるが如し。依之若し消滅すとせんか、消滅したるもの、如何にして、其の結果を招くことを得とせん。無より有を生づとは、佛敎は勿論、普通論理學の認許せざる所也。

爰に於て乎、吾人は吾人の身PHYSICAL中、他に何者か、將來其の結果を招くべき、善惡行爲の原因を保持する、不斷的恒存的性質を有する、或る存在の之れあるを想定せざるを得ず。

然るに吾人の有する可知的の心性MENTAL、即ち眼耳鼻舌身意の前六識の如きは、常に前現象と、後現象と、善と惡と、其の流類を異にし、始終其の對境を變換するのみならず、彼の夢無き熟睡眠裡、若しくは人事不省の場合の如きは、五官神經の官能も休止し、意識の作用も亦全く間斷せり、豈に其の休止間斷して、恒存せざる心識をして、將來其の結果を招く時に至るまで、善惡行爲の原因を、支持せしめんとするも得可けんや。

若し難者ありて、吾人が身体は、精神の如く間斷せず、生命の有らん限り、恒に存して滅せざるが故に、能く這個の原因を持續すと論せんも、吾人は未だ其の身体の何れの部分に於て、之れを保持するか、將た其の保存するもの、如何にして因果の規律を紊亂すること無く、其の結果を招致するか、明に其の然る所以を究め能はざるを如何にせん。殊に吾人の身体は、死滅甚だ速に、時々刻々其の細胞代謝しつゝあることは、生理學者の一致して説く所也。

故に種因ありて、尙其の果實を結ばざるに、身体滅せば、之れに伴つて滅すと云ふを得ん、若し滅無す

と云はば、吾人にして善を積むも、遂に其の餘慶無く、又惡を積むも、竟に其の餘殃無からん也。

有因無果は、世出の理法の共に許さざる所とす。是れに因りて、若し消滅せずと云はば、彼果して那邊にか留存する。身体は既に明に滅するが故に、其の滅無の身体をして、當來結果すべき因種を保持せしめんとするは、到底不可能の事たるを免れず。

爰に至つて吾人は、吾人には恒時不斷に相續して滅せざる、不可知微細の或る心識のあるありて、設令前の善、若しくは惡行爲の現象は、一時其の影を沒せしが如きも、實は此の心識に薰存して、必ず將來に其の結果を感招することを得と確信せざるを得ず。而して此處に所謂微細不可知の心識とは、即ち第八識是れなりとす。

(B)、心理學上、識阈以下に向一種の精神の存在するを認めて、之れを潜在的意識と名け、又佛教中、心識の有無を以て、有情非情の兩種を分類す。然るに吾人が悶絶、若しくは熟睡せる場合に於ては、五官の活動全く休止し、心識亦殆ど作用を呈せざるが故に、無心の状態に似たり。若し全く無心あらば、既に心識を有するものに非るを以て、木石等と一樣に非情物と名けざる可らず。然るに尙有情と稱する所以のものは、蓋し是れ一般に云ふ所の心識以外に、更に不可知の心ありて、所謂無心の觀を呈せる場合と雖も、決して間斷すること無く、常恒存在するに職由せずんばあらず。其の常恒に存在する不可知の心とは、即ち第八識そのもの也。若し此の第八識無くんば、即ち潜在意識無くんば、何んぞ過去の記憶を喚起し、若しくは木石と吾人とを分つを得ん。

以上且く因果律、及び潜在意識心理學上のの両箇をかり來つて、略して第八識の存在を證明し畢る。若し夫れ其の學究的立證の如きに至つては、之を他日の討究に委せん耳。